

れが神から与えられているが故に、その個人の人格の尊厳は、共同体に優先していることを示唆するものである。

ここで、先述の問いである「神の正義(正義の原理)」と正しい国家との関係(共同体の再建)についてのブルナーの回答が提出されている(S.51)。つまり、人間は単に何かであるというだけでなく、何ものかに対する要求と権利を持っていて、彼(彼女)に「何ものかが属している」ということは、創造の中で基礎づけられている。そこから、各人に彼(彼女)のものを与える根源的配分としての正義の原理は、創造者である神の意志であるということ、そして、神の支配に基づき、神に属する人間は、共同体の再建という使命を、信仰を通して愛において実現する。かかる使命を担うか否かは、あくまでも個人の自由であり、誰も他の者が命じることでも代わることも出来ない事柄である。かかる自由は神のみが与え、取り上げることが出来る。つまり、主権は、ただひとり神にのみ属するということがある。

キリスト教的自然における人間の本性は、神によって造られた本源的なもの(規範的)と神に背を向ける離反的なもの(反規範的)として理解されている。正義の倫理が人格ではなく制度の倫理(共同性秩序の倫理)である理由は、人間の本性への深い理解に基づいている。神の創造秩序の目的は愛であり、それを地上で実現するために国家という共同体が造られた。法による強制は、人間を無政府状態の恐怖から保護し、愛に奉仕する為である。

では、キリスト者である愛の人は、いかにして愛を実践する

べきか。それは、直ちにその愛を正義に変換することである。例えば、労働者が労働の正当な報酬である賃金を、使用者から愛の施し物として提供される時、抗議するのは必至であろう。この例は、正義の要求は充たすことが出来るということだけでなく、愛は決して全うさせることがないということを示唆している。人は常に愛を充たすよう負っているという意味で、正義は重荷である。だが、もし、自らを全うする愛が存在するならば、それは間違いなく、限りなき神の愛であり、その重荷が恵みと感ぜられる所以である。

一九一三年のR・ブルトマン

——彼は神学的アヴァンギャルドなのか——

深井 智朗

雑誌『時の間』は今日では、第一次大戦後に誕生した、いわゆるヴェルヘルム世代へのラディカルな批判者である「ヴァイマルのフロント世代」として、既存の神学部で営まれる「大学の神学」や、国家道徳や国家の政治政策を支える政治神学や国家神学の手先になっていた既存の「国民教会制度」を批判し、破壊しようと試みた神学者たちの雑誌として知られている。しかしこの『時の間』には、この時代の新進気鋭「大学の神学者たち」であるブルトマンが参加している。なぜブルトマンはこのクライスに参加したのか。その問いに答えるために第一次大戦前夜の一九一三年のブルトマンの講演に注目してみたい。

ブルトマンは一九一三年九月二十九日にオルデンブルクの「自由協会」で「神学という学と教会的実践」という講演を行っ

た。「自由協会」はヴィルヘルム世代が一八七一年のドイツ統一の神学的な意義をなお信じ、権威と伝統を重んじ、社会の閉塞状況を生み出す政治を行っていることを、既存の政治的な枠組みの中で、それを壊さないような仕方でも批判した運動の総称である。その立場はヴィルヘルム世代の大学神学によって支えられてきた既存の制度をラディカルに批判しようとしたバルトやゴーガルテンとは違っていた。ブルトマンはヴィルヘルム世代の思想や政治的枠組みと新しい政治的諸動向とのゆるやかな結びつきの上に新しい改革の道を模索しようとしていた「自由協会」の立場を支持していた。

ブルトマンによれば、学としての神学は、教会のいかなる実践とも無関係に営まれるのであり、「信仰」や「宗教心」は神学的前提ではないという。そのことは神学は信仰や人間の宗教性を基礎付けるものでもないし、逆にそれを否定し、現代における信仰の不可能性を断言するようなものでもないという。それにもかかわらず、神学部は教会に聖職者をおくり出すために神学的教育をなしており、各ラントの教会の資格試験と接続している。このような中で神学と教会との関係はどのように理解すべきなのか、ということをもブルトマンは真摯に問うているのである。しかしこの問いに答えることは、当時の教会制度をまた神学部と教会との関係を破壊しかねないものであるから、非常にラディカルなものである。ブルトマンはこの矛盾した関係の解決方法、問いに対する答えを彼が大きな影響を受けたヴィルヘルム世代の神学者W・ヘルマンの神学の中に見出した。ブルトマンは「問い」においてはラディカルであり、この時代の

神学的アヴァンギャルドたちと問題意識を共有しているのであるが、「答え」においてはヴィルヘルム世代の神学を受け入れているのである。

さらにこの講演でのブルトマンの政治的意図を見逃してはならないであろう。それは神学の自立性という問題である。ブルトマンが提示する教会の実践と大学における学としての神学との対立や矛盾の指摘は、もうひとつの政治的コンテクストをもっている。それは、この時代の大学神学部の神学と教会の実践の非学問的で無反省な結びつきの中では、政府の政治政策や文部行政の指導や影響を強く受ける神学部では、神学が教会に対して政府の政策を裏付ける神学や政策を無批判に受け入れるための御用神学を提供するためのシステムになってしまう可能性がある、ということなのである。それ故にブルトマンは神学の自立性を強く主張し、神学を伝統や教会という制度からではなく、どこから始めるべきなのか、という問題とこの講演の中で取り組んでいるのである。その点では彼の考えは、大学神学部にも、当時の伝統的な教会制度にも批判的なのであり、その点においてこそ、ブルトマンはあの神学的アヴァンギャルドたちの問題意識と結びつくことができたのである。しかし彼の批判はバルトやゴーガルテンのようなラディカルなものではなく、既存の大学制度の枠組みにとどまり、その意味では彼自身は神学アヴァンギャルドとは言えない。